The Japanism

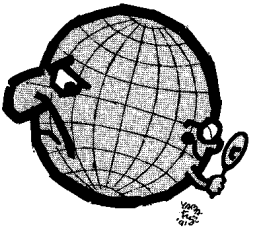
"Japanism" is a word I have coined as the opposite to "globalism", a way of expressing the "we Japanese" mentality of the Japanese people. The stronger this "Japanism" becomes in Japan, the weaker become our ties with the outside world at large.

世界の見方考え方

大前研一
Kenichi Ohmae

The Japanism

"Japanism" is a word I have coined as the opposite to "globalism", a way of expressing the "we Japanese" mentality of the Japanese people. The stronger this "Japanism" becomes in Japan, the weaker become our ties with the outside world at large.



世界の見方・考え方

1991年3月1日　第1刷発行

定　価　1500円（本体1456円）
著　者　大前研一
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目12-21　郵便番号112-01
電　話　東京(03)3945-1111(大代表)
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社

©Kenichi Ohmae 1991, Printed in Japan

落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお，この本についてのお問い合わせは学芸図書第三出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-205205-9　（学三）

世界の見方・考え方——目次

まえがき　11

第一部　目覚めないアメリカ・言いなりの日本

1　門外漢どうしの交渉　23

被害妄想が政治問題に発展する
幻想にもとづく貿易不均衡
怒るふりがうまいアメリカ

2　「戦闘」に勝ち「戦争」に負けるアメリカ　36

栓抜きはアメリカ、飲むのは日本
『「NO」と言える日本』のお粗末
ハイビジョンでも起こすアメリカの錯覚

3　「与党」アメリカと「野党」自民党の関係　51

自民党はアメリカのロビイスト

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本の方から頼む対日要求
アメリカの要求は天にはくツバ
4　ケインジアンの錯覚とボーダレス経済　62
製造業にこだわっていたら失業問題は解決しない
事実が見えていない「産業の空洞化」論
金鉱はマーケットにある
5　アメリカのあやまった資本主義　76
企業は「社会的公器」
ジャパン・バッシングは日本を強くする
「地道な努力」を評価しないアメリカ
想像を超えた混乱が起きる
第二部　世界からも若者からもとり残される社会
1　国際感覚のない日本人　91

浴衣になると失言する政治家
情けない日本の男
外から自分を見る
ピントはずれのぜいたく感覚
ノーブレス・オブリージュ
藤ノ木古墳の奇妙な報道
西郷隆盛は本当に英雄か

2 「四三〇兆円」の洗濯機に群がる政治家

永田町の大芝居
アメリカに予算を約束するのは論外
電話一本ですむ遣ワシントン使
あいた口がふさがらない野党の政策論

3 われわれはだれの犠牲になっているのか

いくら勉強しても英語ができない理由
農民はなぜいるのか

「日本人は味にうるさい」の嘘八百
税金のピンハネ機構
4 世界を見る力がないジャーナリズム 155
見てきたような記事を書く海外特派員
政治の裏話ばかり細かい新聞
画期的なＣＮＮのしくみ
5 成功と学歴は無関係 172
日本はサラリーマン社会ではない
ジャパニーズ・ドリームを持てるか
6 外務省は外交「交渉」をしているか 182
金をバラまくのに忙しい
ＯＤＡを政治的に利用せよ

第三部　だれからも信頼されない大国日本

1　日本を危険な国にする政府・自民党　191

自衛隊「派遣」論議の思考停止ぶり

自衛隊員を犬死にさせるのか

国連の役割はもはや終わった

核持ち込みと浮気の関係

不信をかっただけの北朝鮮訪問

2　その場の気分に流される日本人の不気味　209

靖国問題はこうして解決する

集団ヒステリーに暴走する土壌

「バカげたこと」に全員で突っ走った昭和の終わり

勲章をもらって涙する老人

第四部　こうすれば世界が見える

1　オホーツク自由経済圏構想　229
不毛な北方領土返還論はもうやめよ
交渉相手はゴルバチョフではない
北海道に時差を

2　沖縄が台湾・香港のリゾート地に生まれ変わる　245
漁業権補償のアリ地獄
国境のない地図で世界を見る

3　韓国が最大のパートナーになる　253
韓国人のカルチャーショック
南北統一すれば超大国に
釜山が玄界灘経済圏の中心になる

4　台湾と中国の新しい関係　268

「あんな貧乏なところには住めない」
北京と台北の要人はクラスメイト
日本がはじめに台湾を承認する

5 こうすれば世界が見える

指導者は胸襟を開け
時代錯誤の国益意識
姿鏡
マネジメント・バイ・フライング

6 いまの日本に何ができるか

ソ連はもはや存続していけない
北米にFTAが形成される
日本政府最後の「お務め」
内だけ見ていると右傾化する
個人の意識改革が国を変えていく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

世界の見方・考え方

装幀——川上成夫
カバーイラスト——山藤章二

まえがき

東西の冷戦が終わり、南北対立の図式が表面化してきている。これは貧富や生活の格差が拡大している以上、やむを得ない対立であろう。しかし南の国の大半は北の世話にならなくては生きていけないので、ふだんはあまり大きな問題が起こせない状況になっている。ソ連もペレストロイカによってその立場が東から南に変わってしまった。むしろ東の横綱としてアメリカと対峙していた時の方が世界は安定していたのかもしれない。中国やソ連のような全体主義の長く続いた巨大国家が、自由経済と民主主義に移行するのは容易なことではない。イラクのサダム・フセインが同国の大統領になったのは一九七九年の七月であるから、サダムによる全体主義の歴史はわずか一〇年にすぎない。それでもイラク国民をあそこまでの個人崇拝と狂気に引っ張っていけたのである。中国やソ連ではスターリンや毛沢東の個人崇拝が壊れたあとも、一党独裁が今日にい

たるまで半世紀にわたって続いている。これらの国が西側諸国と融和していくためには、長期間の解凍作業が必要である。たんに〝主催者側〟の発表と行動だけに頼るわけにはいかない。なぜなら、いま世界で起こっている現象は、単一イデオロギーに支配された巨大国家の終焉ということだからだ。情報化が進み、市場経済がグローバル化してくると、産業はもはや国家の指導できる範囲を越えて世界化してしまう。また個人の受ける情報を国家が統制することが困難になるので、単一価値観を長期にわたって押しつけていくこともむずかしくなる。このようにして経済は国家(ネイション)よりも地域(リージョン)というあきらかな共通利益体を中心に動きはじめる。ダニエル・ベルがかつて言ったように、国家は単一価値観を押しつけるには大きすぎ、地球規模の難問を解決するには小さすぎる単位となってしまったのである。

そんなさなかにあって、われわれにとって本当に大切な地球規模の問題はイラクでも中東でもない。これはいままでにも何回も起こった中東戦争の一環だろうし、また第二次大戦後のどさくさに西欧列強が自分たちの都合でつくり出したまちがった解決策の後遺症にすぎない。アメリカがそこにあやまって手を突込んだために世界中が巻き添えを喰って大騒ぎになったのであるが、今回のイラクのクウェート侵攻が歴史的にみてそれほど大騒ぎをするに値することなのか、という疑問は残る。アラブの大義をかかげてアラブのなかで覇権を求めた人びとはナセルやホメイニのように長続きしていないし、アラブ内部の牽制(けんせい)も十分に働いている。また、それが機能しないところではイスラエルという天敵もいる。今回もアメリカがせめてガルフに艦隊を派遣するぐら

いで止めておいたら、西側先進国はより重要な問題にその目を向け続けることができたはずである。そのより重要な問題とは一五〇年近く続いた国家主義（ネーション・ステート）から地域主義（リージョナリズム）への移行である。この概念なくしてはソ連や中国のおだやかな解体はできないし、またヨーロッパ共同体や北米自由貿易圏の形成もできない。ましてアジアにおける真の安定も築けない。アメリカは日本に対しては二四〇項目にもわたる細かな要求を構造協議と称して突きつけてきているが、ソ連に対してはきわめてシャイで控えめだ。自由経済に移行するのなら五〇〇日計画を全面的に支援すべきであるのに、みずからのエネルギーをクウェートに注入しているあいだに、それらの改革の旗手たち（ヤコブレフ、シャターリン、ペトラコフ氏ら）がつぎつぎに更迭されてしまっている。アメリカおよびその友好国は、ここで世界史に残る優先順位の勘ちがいをしている。ソ連では保守派の巻き返しが強く、いまや大手をふって自由主義経済に移行しようという理念闘争ができにくくなっている。中国で五、六年前に起こったのと同じ籠（かご）の鳥論争がソ連でも起きているのだ。ECはせめて東欧だけでもまず自陣営に引き入れてからソ連のドロ舟救済に入ろうとあせっていたが、その恐れは現実のものとなりつつある。

アメリカも日本も、世界の大きな流れを読むのがよほど下手とみえる。ボーダレス・ワールドでは武力ではなく、経済の相互依存が安全保障を高める。それは自由主義陣営が長年「桃源郷」としてきたものであるのに、その夢が間近に実現できる入口に世界中が立ったかに見えたとたんに、昔の、「やはり世界は武力」というイデオロギーに戻ってしまった。戦後半世紀近くしてよ

うやく日本に経済大国の役割とリーダーシップを期待しよう、という気運の高まっていたその時に、日本はアメリカの銃口のもとでみずからの信念をぐらつかせ、アメリカの太鼓持ちとして中東派兵などのあやまった議論を衆目にさらしてしまった。両国とも国家主義が自然死を遂げるのを大きく後退させてしまった。先進国への仲間入りは武力でも、領土でも、資源でもなく、世界市場を相手にまじめに開拓努力をすることから達成される、というそのことがもう少しで証明される時に、先進国は集団でそういう努力をしようとする途上国の希望を奪ってしまった。またECもどうかしている。食糧安保が経済の相互依存によって促進される、ということをもう一歩でお互いの機構のなかに盛り込める時に、各国はエゴを丸出しにしてウルグアイ・ラウンドをつぶしてしまった。この責任の一端は日本にもある。情報化の進展で個人の利害は国家の利害よりも〝地球〟の利害の方に一致しかけている時に、やはり国家だ、主権だという議論に戻ってしまった。

これら一九九〇年後半から一九九一年初頭にかけて起きた一連のできごと（ソ連のゆり戻し、中東戦争、ガットの決裂など）すべてが大局観のない世界の数人の指導者によって引き起こされている。これは惜しいことである。ほんのちょっとしたちがいでまったく新しい世界に入ることができたと私は思う。情報化時代とはいっても各国の指導者は昔のような考え方をかならずしも捨て切れていないし、また新しい世界の流れをつかむための思索の時間がかならずしも十分ではない。また歴史的にみて、古い戦いに勝ち抜いてきた人びとが、新しい時代の考え方を受け容れる場合よりも、新しい考え方をもった人びとが大衆から支持されて、古い人からリーダーシップ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com